

平成28年度 学校法人皇學館・篠田学術振興基金助成研究

近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会
ニューズレター



平成28年度第2回研究会（天祖神社 東京都板橋区）

公開研究会開催

平成29年3月6日～7日に平成28年度第2回研究会を開催しました。

3月6日は天祖神社（東京都板橋区）において境内散策、正式参拝、神社説明の後、活動報告と研究発表が行われました。

3月7日は東京都健康長寿医療センター（東京都板橋区）内にある「養育院・渋沢記念コーナー」の展示見学及び資料室の資料閲覧を行いました。

会場を提供してくださいました天祖神社さま、資料閲覧などご高配をいただいた東京都健康長寿医療センターの方々にて改めて感謝申し上げます。



目次

第4号

公開研究会開催……………1
 第2回研究会プログラム……………1
 地域の歴史と神社の地域活動
 :対立から融合へ……………小平 美香 2
 社のまちや……………2
 ときわ台・天祖神社訪問記
 ……………遠藤 慶太 3
 天祖神社……………3
 渋沢栄一について……………山路 克文 4
 養育院の歴史と役割
 ……………宮城 洋一郎 5
 東京都健康長寿医療センター
 訪問記……………井上 兼一 6
 韓国・東義大学校 金教授グループ
 との研究交流 at 皇學館大学
 ……………冬月 律 7
 岡山県立記録資料館所蔵の「恩賜
 金」関係資料の調査報告
 ……………櫻井 治男 9
 内務省衛生局『精神病患者収容施設
 調』記載の岡山県内神社及び関
 係資料調査報告……………金田 伊代 11
 活動報告 平成28年度……………13
 会員の主な業績……………13
 出張報告 平成28年度……………14
 編集後記……………14



第2回研究会 プログラム

1日目・研究会

（平成29年3月6日（月）13:00～17:00

於 天祖神社・東京都板橋区）

- ① 【代表挨拶】新田均
- ② 【報告】櫻井治男「本年度の事業概要と次年度以降の研究活動について」
- ③ 【発表】小平美香「常盤台の歴史と神社の地域活動:対立から融合へ」
- ④ 【発表】山路克文「『渋沢栄一の社会事業研究』について」
- ⑤ 【発表】宮城洋一郎「養育院の歴史と役割」

- ⑥ 【報告】冬月律「韓国・東義大学校 金教授グループとの研究交流 at 皇學館大学」
- ⑦ 【報告】金田伊代「岡山県における神社調査の目的」
- ⑧ 【報告】宮城洋一郎「岩手県庁文書調査について」

2日目・エクスカージョン

（平成29年3月7日（火）10:00～12:00

於 東京都健康長寿医療センター・東京都板橋区）
「養育院・渋沢記念コーナー」の展示見学及び所蔵資料閲覧

地域の歴史と神社の地域活動

:対立から融合へ

小平 美香*1

本報告は教化活動の一環で、神社が境外地に設ける公共空間「杜のまちや」建築をめぐる経緯と諸問題を、対立と融合という枠組みにあてはめ発表したものである。

新しい公共空間を作るにあたって建築設計を担当し、建築にコモンリティ(Commonality)を提唱する「アトリエ・ワン」から提案されたのは、神社と地域の人々がワークショップによって、共に「建築」について意見を出し合うということであった。ワークショップに参加したのは、それまで神社とは関わりがあっても、つながりのない—神社総代、町会関係者、福祉関係者、区議会議員、イラストレーター、小学校の地域コーディネーター—といった氏子内外の人々である。

6回開催したワークショップでは、立場や思惑の違いから様々な意見の対立があった。それを超えて浮かんできたのが「防災」というキーワードである。この「防災」という言葉は、ワークショップでの意見対立のみならず、「神社」と「行政」という難しい関係をも融合させることになる。神社と板橋区とが初めて「災害時における帰宅困難者対策の連携協力に関する」協定を締結することになったのだ。

しかし、一方では運営にあたって諸問題も見えてきた。それらを「対立」として考えてみると、「旧住民と新住民」あるいは「旧農村と都市」「福祉と神社」など様々な緊張関係がみえてきた。かつては「字」という小さな区画の集合体によって一つの村が構成されていたように、一口に「氏子地域」といっても、氏子地域を構成する個々の町の成り立ちや歴史は、それぞれに違いや特色がある。その歴史は、世代が変わってもそこに住む人々に、今なお大きな影響を与えており、それが地域の中で緊張関係を生む一つの隠れた要因にもなっていることを、今回の地域活動の実践によって実感した。

境外地のこの公共空間が、地域の歴史・文化の発信拠点として、そして地域の様々な対立関係を融合させる場となり得るか否かは、これからの運営にかかっている。

あとがき

杜のまちや竣工から一か月がたった。もともとは町会などを中心とした地域交流の場づくりであったが、今のところ地域内よりも、地域外の若い世代の反応が多い。

この場を求めてくる人々の活動に啓発されつつも、研究会当日、先生方からいただいた貴重なアドバイスをもとに、まちやを通して神社のもつ良さを感じてもらうことから始めていきたい。

杜のまちや

(「ごあいさつ」より抄出)

このたび、ときわ台南口駅前に「杜のまちや」を開設いたしました。地下1階、地上3階のまちやは「食」「集い」「学び」をテーマとした町に開かれた「町のいえ」です。

ここで、それぞれのテーマから様々な活動が展開されることを考えています。また「杜のまちや」は板橋区と協定を結び、区内初の試みである民間における公共の一時避難所として、防災の機能も備えています。

おたなんぼ 文人・大田南畝(蜀山人)

落語でもおなじみの江戸の文人・大田南畝(1749-1823)がこの界隈にやって来ました。

江戸地誌見聞録である『武江披砂』には、南畝が神明宮(現・天祖神社)に参拝した記録があり、平成29

年は南畝来訪220年という記念の年でもあります。南畝は幕府の官吏でありながら、江戸をこよなく愛した狂歌師であり、様々な文人との交流の中から、江戸文化を興隆させました。

大田南畝とその来訪にちなみ、地域内外から様々な文人がこの地に訪れ、「杜のまちや」が「知の交流」の場ともなるよう、まちやの活動のシンボルに「大田南畝」を起用しました。



杜の記憶

「杜のまちや」が建つ場所は、かつてうっそうとした神社の森の一部でした。その記憶を留めるために、建物の前におがたまの木を植えました。このおがたまの木には「杜のまちや」がときわ台の町と共に元気に育っていくようにという願いもこめられています。

(<https://www.facebook.com/tokiwadaimorimachi>)~



ときわ台・天祖神社訪問記

遠藤 慶太*2

東武東上線の「ときわ台」、駅の商店街からすぐの鎮守の杜が天祖神社です。このたび天祖神社禰宜の小平美香先生が会場をご提供くださり、研究会メンバーでお社を訪問することになりました。

東京以外の地域では、あるいは「天祖神社」の名称に耳なじみがないかもしれません。明治6年、当時の東京府では神明社・神明宮を「天祖神社」と改称しています。ときわ台の天祖神社は江戸期には「神明宮」ともいわれ、川越街道「上板橋宿」の鎮守でした。

メンバーうちそろって正式参拝の後、神楽殿を会場に小平先生から「常盤台の歴史と神社の地域活動」と題する率直な報告をうかがいました。住宅開発を契機とした北側(分譲地)と南側(商店街)との気質の違いなど、いくつかの課題を抱えながらも、神社に関心を寄せるさまざまな人たちがいて、人と人を結びつける神社の機能が浮かんできます。

神社と地域、公共性という具体的で身近なお話なので、活発な質疑が交わされました。天祖神社が主体となって創られる新たな公共スペース「杜のまちや」ひとつとっても、手間や時間をかけながら、地域のなかで役割を果たしていこうとするお社の姿勢に感銘を受けました。櫻井先生が「あらゆる神社活動は教化なんだ、という考えがありますね」とまとめられたのが印象に残ります。

それもあって研究会の翌日、私はもういちど天祖神社に参拝しました。目的は建設中の「杜のまちや」見学と、オリジナルで作成されたおみくじ「天祖神社歌占」です。

じつは最近、大阪府藤井寺市の神社で『萬葉集』を題材におみくじに関わる機会があり、参考例を調べてみると評判の高い歌占に行き当たったのです。

今回の研究会、これはご縁だと感謝しながら、小平先生から歌占作成までのお話をうかがって、梅の香が気高く匂うお社を辞去した次第です。小平先生、ありがとうございました。



和歌による占い「歌占」



天祖神社

主祭神:天照大御神

配祀神:豊受姫命、大山咋命

由緒:板橋地域でも古く最大規模の村だった「上板橋村」の鎮守。創建は不詳だが、後深草天皇のころ、上板橋村字原に天照大御神の影向があり、そこに「伊勢社」を勧請したという伝承がある。

例祭日:9月21日

鎮座地:東京都板橋区南常盤台 2-4-3

アクセス:東武東上線「ときわ台」駅

南口下車1分

公式HP:<http://www.tokiwadai-tenso.or.jp>

ときわ台 つつ・つつガーデン

ものづくりを通じて人々がつどい、つながることを目指したアートイベント。

境内で地域の飲食店の出店やものづくりのワークショップ、ライブなどが行われる。震災前まで地域の商店会が神社境内で行っていたフリーマーケットを発展的に継承した経緯をもつ。

企画代表者が、福祉施設のコーディネーターで、区内の多くの福祉施設が参加していることも特徴。祭礼の賑わいとはまた趣の異なる行事である。

新しい行事のため、場を提供する神社としても手探りの状況であったが、今年で5年目を迎え、地域の行事として定着した感がある。



渋沢栄一について

山路 克文*3

私ごとであるが、現代日本社会学部が開設された当初から、学部の看板科目のひとつとして「日本人物論」という科目がオムニバス形式で開講されている。筆者は渋沢栄一と石井十次を担当しているが、今回の研究会では、渋沢栄一(以下、渋沢と略す)の人と業績について、基本的な事項(本科目の講義概要)のみの内容となってしまうことに対してお詫び申し上げたい。(注1)

渋沢は、江戸時代の終焉期から明治・大正と生き、91歳で生涯を閉じた長命な実業家であり、社会・教育事業家でもあった。平成23年10月8日付の日本経済新聞「文化欄」において「日本資本主義の父」という見出しとともに、経営学の権威ドラッカーも「彼は世界のだれよりも早く、経営の本質は『責任』にほかならないということを見抜いていた」とし、渋沢が近年高く評価されていることを報じている。

渋沢は、大きく分けて3つの膨大な業績がある。ひとつは実業家として設立した企業の数は約500社と言われ、数多くの企業が今日も日本を牽引している。また教育者としての業績も多く、現在の一橋大学、大阪市立大学、神戸大学、日本女子大学、同志社大学等の設立に深く関与している。そして、渋沢が最も多くの時間を割いたのが、社会事業である。1876(明治9)年養育院事務長に任命され、3年後に院長に就任してから1931(昭和6)年に没するまでの51年の長きにわたり、院長を務めた。

渋沢の社会事業観は、山名によれば「渋沢の名声をもって大口の資金を集めることはできるが、それではそこで『打ち切りの気持ち(継続性が無い)』になってしまう。そうではなく資産家が事業費からではなく、自分のポケットから毎年、若干ずつ捻出することで『自然に自分の仕事のように思わせることが大切』といい、賛助会員方式を提案したとされている」つまり、渋沢にとって、社会事業とは、「公」すなわち民衆をも含みこんだ「公(おおよけ=パブリック)」のものという考えを基礎に据えている。(注4)

渋沢は、まず、人間はどうあるべきか、どう生きるべきかを論語に求め、その問いを前提に経済が発展することを願った思想家であり哲学者であると考え。

しかしながら、渋沢の生きたとくに明治期は、急速な近代化を志向する明治政府が、列強に追いつき追い越せを旗印とした殖産興業・富国強兵政策下で、貧困問題対策を後回しにせざるを得ず、その結果、貧困の自己責任(惰民観思想)を強調し、様々な制約をかせ

た政策(恤救規則)を続けた時代でもあった。そんな関係から民間の篤志家による慈善事業や皇室の慈恵事業に負うところの多かった時代でもある。

渋沢の哲学は論語にある。かつてアダム・スミスは、「道徳情操論」において人と人の「共感」を説き、また「国富論」において有名な「神の見えざる手」は、市場経済の自動調節機構を説いた。渋沢も次のような言説で持論を説いている。

「余は仏教の知識なく耶蘇教に至っては更に知る所がない。そこで余が実業界に立ちて自らを守るべき規矩準繩(規則、標準)はこれを仏・耶の二教に取るに能はず、しかも儒教ならば不十分ながら幼少のときより親しんできた関係があり、とくに論語は日常身を持し世に処する方法を一々詳示せられておるを以て、これに依拠しさえすれば人の人たる道に悖(もと)らず、万事無碍円通し、何事にて判断に苦しむ所あれば、論語の尺度を取ってこれを律すれば、必ず過ちを免るるに至らんと硬く信じたり」(注3)

渋沢の論語については、渋沢栄一(守屋敦訳)『現代語訳 論語と算盤』(ちくま新書)に詳しく論じられている。

今日、資本主義の飽くなき利益追求が、世界を席卷(グローバリゼーション)し、世界各地で起こる紛争やテロの脅威が、世界を変え人間の心も変えていく。まさに資本主義の暴走が、変革ではなく「変態する世界」(ウルリッヒ・ベック)と化している。(注2)

不安定さを増す世界情勢を読み解くことが、今日ほど難しい時代はないように思われる。この難しい時代を読み解いていく鍵はいくつかあると思われるが、その一つに日本の近代化の礎を築いた渋沢栄一の人と業績から、資本主義の原点をを検証する意義には大きいと考える。それは、経済一辺倒とか経済至上主義と呼ばれる今日にあって、まず人が生きることの原点を問い、その上で経済とはどうあるべきかを論じる渋沢の示唆は大変大きいものがあると考え。



注

1. 山路克文『日本人物論』(渋沢栄一・石井十次)講義ノート」皇學館大学現代日本社会学部 日本学論叢第2号、平成24年3月。
2. ウルリッヒ・ベック(枝廣淳子・中小路佳代子訳)『変態する世界』岩波書店、平成29年。
3. 松川健二「行動の指針としての『論語』:義と利の間」渋沢研究会編『公益の追求者・渋沢栄一』山川出版社、1999年、338-350頁。
4. 3に同じ。山名敦子「慈善・社会事業と実業の接点」278-293頁。

養育院の歴史と役割

宮城 洋一郎*4

今回の報告では、養育院の明治～平成に至る百二十余年の歴史について、その歴史を支えた人々、処遇の意義を中心に述べていくこととした。参照した文献は主に『養育院百年史』(東京都養育院編、1974年)で、同書は日本女子大学 一番ヶ瀬康子氏(1927-2012)が中心となって調査、研究、編纂を担って刊行された。同書の記述に沿いながら、あわせて養育院に配付された恩賜金に関するデータを作成し、その動向を検討することにした。

なお、養育院の歴史に関しては、『養育院百二十年史』(東京都養育院編 1995年)も刊行され、さらに『ようこそ 養育院・渋沢記念コーナーへ』(東京都健康長寿医療センター、2016年)は、簡明にその歴史と意義を明らかにしている。

養育院の歴史は、移転の歴史でもあった。本郷・旧加賀藩邸、上野・護国院跡、神田和泉町、本所長岡町、大塚さらに板橋と、移転を重ねた。その間に、廃止論が起き、渋沢栄一(1840-1931)の反駁があり、公営を基軸とする運営方式が幾度もの困難の中で追求されてきた。ここに通底するのは、「ナショナルミニマム」への確かな理念であったといえる。そして、それを支えたのが恩賜金であった。

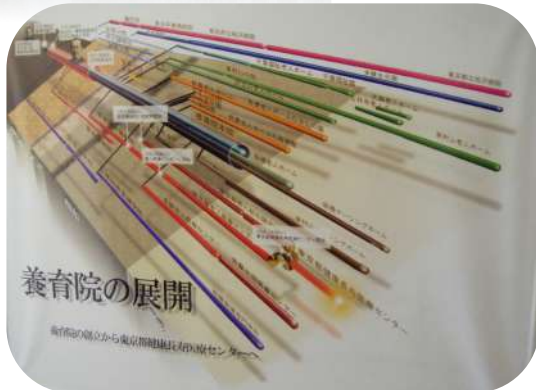
明治初期から昭和戦前期までの恩賜金に関するデータを収録している遠藤興一氏「恩賜・下賜金の支出状況からみた天皇制慈恵主義」(明治学院大学『社会学・社会福祉学研究』第122号、2006年)をもとに、年表を作成した。これによると、皇室から養育院、福田会育児院、赤十字社、慈恵会病院の4団体に恒常的に恩賜金が事業補助として配付されている。養育院の場合、この他に特別な行事などの折にもしばしば配付がなされていた。これが、昭和7(1932)年1月の「救護法」施行以降は、1例に限られ、事業補助が主となっていく。

こうした傾向は何を意味するのだろうか。そこには、救護法という公的救済義務を明確にした法制定以前の段階では、皇室による特別な救助が確かな財政援助の意味を有していたと考えることができるのではないだろうか。

こうした論点については、他の団体との関連も含めて検討されるべきで、今後の史料調査に待つべき点が多いことを指摘しておきたい。



健康長寿医療センター外観



養育院の展開図



資料の閲覧



東京都健康長寿医療センター 訪問記

井上 兼一*5

3月7日、養育院と恩賜金にかかる調査のため、東京都健康長寿医療センターを訪問した。訪問者は、櫻井、宮城、山路、遠藤、小平、金田、井上である(敬称略)。

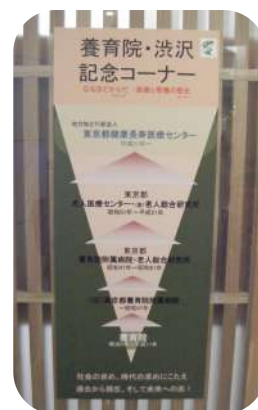
当初は、外来棟に設置されている「養育院・渋沢記念コーナー」を見学し、養育院の沿革や関連資料を確認する予定であった。ところが、思いがけずセンター内に収蔵されている史・資料を閲覧する機会を得ることができた。養育院に関する史料蒐集、研究に取り組まれているのは、稲松孝思氏である。稲松氏は顧問医としての業務にあたりながら、養育院に関する研究を進められている。短い時間であったが、資料の紹介と研究成果の一端を拝聴できたことは収穫であった。

養育院の設立と運営に関しては、渋沢栄一(1840-1931)の功績としてこれまで評価されてきた。稲松氏によれば、設立に関しては大久保一翁[忠寛](1818-1888)の存在が大きいという。大久保は江戸幕府に出仕し、外国貿易取調掛・蕃書調所頭取のほか、会計総裁などの要職を歴任した人物である。また、1857(安政4)年には、七分積金などの基金設立により、西洋式の病院・孤児院・貧困層救済施設の設立を構想する「幼院病院設立意見書」を提出するなど、江戸時代においてすでに社会的弱者を救済する思想を有していたようである。

その彼が東京府知事(第5代)に就いた折、維新後に急増した窮民を收容かつ保護するために養育院を設置した。原資となったのは、府の「営繕会議所の共有金(江戸幕府の松平定信により創設された七部積金が明治政府に引き継がれたもの)」であった。こうした資金の運用については、幕末に会計総裁を経験した大久保ならではの手腕であったと推察される。



健康長寿医療センター入口と
養育院・渋沢記念コーナー



渋沢栄一については、養育院の運営に尽力したことは言うまでも無い。渋沢は、1874(明治7)年から営繕会議所の事業および共有金の管理に携わり、養育院事業にかかわるようになった。1879(明治12)年には初代院長となり、その後亡くなるまで、五十有余年にわたり院長として事業の発展に力を尽くした。恩賜金に関しては、渋沢が皇后宮大夫の香川敬三にあてて、要望書を送るなどしており、勅使の視察をふまえて下賜されていることが分かってきている。

養育院については、これまで渋沢の功績だけが注目を浴びていたが、大久保をはじめとする、同時代を生きた人々のかかわりと努力が横たわっていることを理解することが必要であろう。

所蔵調査に関しては、限られた時間であったため、『養育院六十年史』、『養育院百年史』『写真帖』のほか、恩賜金に関する公文書を整理・製本した資料集に目を通し、一部を複製したところで時間切れとなってしまう。しかし、今後研究活動を進める際の大きな参考になったことは確かである。

鋭いメスで研究史に切り込まれ、新たな知見を見出された稲松氏に対して敬服するばかりである。史料を誠実に読むことの大切さを再確認することができた訪問であった。

末筆ながら、センターの利用に際して特段の御高配をたまわり、心より御礼申し上げます。



養育院・渋沢記念コーナーで稲松氏より説明を受ける



中庭 渋沢像の前で



皇學館大学 9号館前にて

韓国・東義大学校 金教授グループとの研究交流 at 皇學館大学 冬月 律*6

去る11月27日に、朝鮮総督府時代の韓国における恩賜金研究に取り組んでいる韓国の金教授の「最近150年間釜山地域事業体DB構築及び活用」プロジェクトの主要メンバーが来日し、皇學館大学の「近現代日本における皇室の福祉事業に関する基礎的研究」(以下、本研究会)との交流および調査研究を行った。参加メンバーの紹介と日程については以下のとおり。

研究代表者: 金仁鎬(Kim・InHo、東義大学校教授)

研究メンバー:

李俊英(Lee・JunYoung、東義大学校博士課程)、
鮮于性恵(Sunwoo・SungHey、東義大学校助教)、
金예슬(Kim・YeSeul、東義大学校博士課程)、
裴錫満(Bae・SukMan、高麗大学校教授)、
黄仁奎(wang・InGyu、東国大学校教授・佛教大学
客員研究員)

日程: 2016年11月27日(日)~30日(水)

- 27日; 来日。関空から伊勢市内に移動し、本研究会メンバーとの歓迎会を開き意見交換。
- 28日; 皇學館大学にて本研究会との打ち合わせ、博物館、図書館、神宮文庫の見学。
- 29日; 伊勢市から京都に移動し、京都大学での近代の史資料収集、大阪府の近代建築物の視察。
- 30日; 帰国。

27日から30日と短い日程でありながら、27日・28日の両日にかけて皇學館大学において本研究会のメンバーとの意見交換を行った。以下では28日に行われた研究打ち合わせでの内容を中心に紹介する。

28日の午前10時に皇學館大学現代日本社会学部学科研究室に金教授一行および本研究会メンバーが集まった。まず本研究会の代表である新田均教授により、歓迎の挨拶が述べられ、本研究会の趣旨の説明および金教授一行が進めている恩賜金研究について、確実な史料を踏まえながら堅実な研究を互いに進めていくことの決意を述べられた。

その後、金教授による今回の来日目的の説明と恩賜金研究にかかる計画についての説明があり、これまでに皇學館大学のメンバーとの交流は今回で4回目に当たり、本格的に研究を進める段階にきていることを述べた。金教授が準備したプロジェクト研究の資料では、5年目(最終年度)における集中推進事業の15項目のうち、本研究会と関係する事業として(3)「釜山市民図書館所蔵資料(近代)との連携及び共同データベース構築の推進」(7)「釜山地域恩賜金及び恩賜事業の動向に関するプロジェクトの推進」の二つが含まれており、恩賜金研究が金教授のプロジェクトにおいても重要なテーマであることが強調された。

さらに、既存のメンバーに新たに2名の研究者を加えたことを述べられた。新たに研究メンバーとなったのは、黄仁奎教授と裴錫満教授の2名。まず、黄仁奎教授は仏教思想史研究を専門としており、現在在外研究のため日本の佛教大学(京都市)の客員研究員として滞在中である。日本に滞在していることもあり、金教授の研究においては主に日本国内の資料収集を担当する。もう一人の裴錫満教授は、東京大学で近代史を学ばれ、恩賜金研究にも知見が深い。また、裴錫満教授が所属する高麗大学校には朝鮮総督府時代の史資料が集約されていることから、金教授の研究においてはその利点を活用すべく、韓国と日本が所蔵する史資料の比較研究を担当する。

続いて、金教授らと本研究会との共同研究について、次のような意見があった。まず、本研究会の宮城洋一郎教授による恩賜金研究、つまり恩賜金の配分に関する事例研究から、「地域」という観点に新たに着目する意向が示された。これまでの情報交換を通して、日本側で進めている恩賜金の研究によって、大震災や自然災害時の恩賜金配分については理解が深まったが、地震による災害が少ない韓国では共通点を探るこ



新田代表挨拶(現代日本社会学部学科研究室)

とは難しく、むしろ風水害による凶作などは、場合によっては日本と同時期に発生している可能性もあり、その時の状況を比較することも視野に入れてはどうか、との意見が出た。とくに、釜山広域市立図書館の協力が得られる体制が整ったことを述べ、その利点を活用し、資料の共同調査の提案がなされた。

また、宮城教授によって共有文献として、大友昌子『帝国日本の植民地社会事業政策研究：台湾・朝鮮』（ミネルヴァ書房、2007年）が紹介された。大友による研究は、①韓国における社会事業は恩賜金を基盤として出発していると捉え、本来的に近代国家における社会事業は国家財政で賄うという考え方が、韓国の状況はそれとは異なっていること、②韓国では福祉の文化基盤が十分ではなかったことを指摘しつつ、日韓併合時は日本の社会事業が韓国の社会事業より上位に位置づけられていること、③韓国は恩賜金に依拠して社会事業が展開していったこと、などの主張がなされている。宮城教授によれば、日本における恩賜金は迅速に下賜されたことが世論の意識を高める役割を果たし、政府の災害救助は財政的に弱く、恩賜金の役割が大きかった事実からして、皇室がリードし政府がその後を追いかけるといった構図があったと述べ、もしそうであれば、大友氏によるこれらの主張にはいくつか疑問が残ると指摘した。その意見を受け、金教授は、韓国は1930年の世界恐慌時に日本からの恩賜金の援助があったことは史料で確認できるし、戦後における従前の総督府財産などと、朝鮮戦争による孤児、避難民救済事業の関わりをみると、恩賜金が権利の温床ともなっていたのも事実ではあるが、具体的な検証が必要であろうと述べた。



皇學館大学図書館にて資料閲覧

一方、金教授より、社会事業に関する新たなテーマとして、釜山の孤児院、済生院と恩賜金との関係についても意見が出た。これらに関わる施設は朝鮮総督府の管掌するところであったものが、終戦後および朝鮮戦争後（日本人が去ってから）はそうした事業は韓国人が担うこととなった。その間の韓国社会における社会事業の連続・非連続の研究は重要であり、合わせてハンセン病への措置、北（現在の北朝鮮）から南への避難民に対する救済など、釜山という地域を研究対象にした研究も有益であるため、これらのことを含め、恩賜体制についての理解を深めていきたいと述べた。



皇學館大学 神道博物館

以上のように、お互いの研究に共通する点や関心分野についての意見交換が行われた後、金教授一行は神道博物館で展示物の拝観、神宮文庫の見学（窪寺恭秀氏の案内）、図書館での史資料閲覧などを行った。その後、学内食堂で食事をとったあと解散となり、金教授一行は伊勢神宮や市内への見学に向かった。

今回の意見交換会で得られた成果を以下に述べる。

2015年10月に韓国日本近代史学会における金教授との出会いを契機に、金教授の研究プロジェクト一行と研究交流が始まって今回で3回を迎えた。時間の流れが速いことが今更ながら感じられる。この3年間、それぞれの研究にも各方面で大きな進展があり、とくに恩賜金に関する研究成果も着実に蓄積されてきた。今回の韓国側の来日は急に知らされたものであり、本研究会のメンバーは緊急招集をかけて参加が可能だった人を中心に金教授一行を迎えることとなった。さらに、打ち合わせも1時間弱という限られた時間で進めることとなり、個人的には準備にかかる時間があまりにも少なく、まともな議論ができるのか、といった不安もあった。しかし、実際の打ち合わせの場で交わされた内容はいずれも濃い内容ばかりで、日本と韓国両側の恩賜金研究に資する内容に富んでおり、今後の研究に大きなヒントも互いに享受できた。ただ、提示されたそれぞれの研究課題に取り掛かる人員と時間が不足しているといった問題も共有された。



神宮文庫 入口

岡山県立記録資料館所蔵の 「恩賜金」関係資料の調査報告

櫻井 治男*7

平成29年3月24日(金)に岡山市北区南方2丁目の岡山県立記録資料館において災害時における「恩賜金」下賜関係の資料調査と収集を行った。当館はJR岡山市駅より徒歩20分程の地、「きらめきプラザ岡山県総合福祉・ボランティア」施設の後方にある3階の建物で、閲覧室は2階にある。新幹線で大阪より岡山市駅へ入る左手前に施設が望めそうな場所に立地する。調査は、櫻井と金田伊代が担当した。

閲覧した資料は、同館に収められた県史編纂等にかかる事業で収集・収蔵された資料群のなかより「恩賜」「災害」のキーワード検索で得られた数点と明治17年の海嘯関係及び同25年の水害関係の県庁文書(簿冊)である。資料館職員の方のお話では、昭和20年6月29日の岡山空襲で多大の被害を受け県庁文書はほとんど残っていないとのことであった。館のホームページは次の通りで、資料検索がスムーズに行える。

(<http://archives.pref.okayama.jp/>)

【閲覧資料】

- ①[明治三十五年凶作窮民救恤の恵与殊勝の事]
明治38年10月1日(賀陽郡上足守村的場家資料)資料番号「B00009-429」
- ②[明治三十八年県下凶作窮民救恤の寄附殊勝の事]
明治41年2月1日(賀陽郡上足守村的場家資料)資料番号「B00009-438」
- ③[明治三十八年凶作窮民救恤金寄附にて岩手県より褒詞送付に付回送の事]
明治41年8月6日(賀陽郡上足守村的場家資料)資料番号「B00009-441」
- ④[謝状](寄附金奇特につき)
明治41年2月1日(石川禎治関係資料)資料番号「B00134-47」
- ⑤[窮民救恤金寄附に付感謝状]
明治37年4月15日(都窪郡早島町大森家資料)資料番号「B00174-109」
- ⑥[窮民救恤金寄附に付感謝状]
明治41年2月1日(都窪郡早島町大森家資料)資料番号「B00174-112」
- ⑦[海嘯関係書類 岡山県]
明治17年 資料番号「C-39-11」
- ⑧[水害関係書類 岡山県]
明治25年 資料番号「C-39-15」

以上のうち、①～⑥は、明治35年に生じた北日本大冷害以降の「明治凶作群」と称される災害において、岡山県内の篤志家が金員を寄付したことにより、当該地域の知事より発給された文書である。

例として①の内容を一部紹介しておく。本資料は、郡役所・金額・名前の箇所は手書きであるが、他は印刷されており、知事名には捺印されている。また、明治35年の凶作への感謝が数年を経た38年に、被害のあった4県知事の連名で出されたことが分かる。同様のパターンは②～⑥についても見られ、寄付に対する感謝という内容である。

入間郡役所
一金 拾銭 的場與七郎
明治三十五年県下凶作二因ル救民救恤トシテ頭書ノ通惠與候段殊勝ニ候事
明治三十八年十月一日
宮城県知事従三位勲二等 田邊 輝實(印)
岩手県知事正五位勲四等 押川 則吉(印)
福島県知事従四位勲三等 有田 義資(印)
青森県知事正五位勲五等 西澤 正太郎(印)



⑦⑧の資料は、「恩賜金」関係の資料を探しているとお話したことがきっかけで、館職員の方より「恩賜の蒲団をご存知か」と問われ、教えていただいた資料である。資料の存在については、同館発行の『岡山県立記録資料館だより』第7号(平成23年9月、1頁「高潮・高波が岡山を襲った: 明治十七年海嘯関係書類」)に、被害地地図とともに簡潔に紹介されている。いずれの簿冊とも分厚く、一部写真を撮影させていただいたが、綴じ込みなどにより読みがたい箇所もあった。

⑦は、明治17年8月25日夜、台風通過による海嘯(高波)で倉敷市水島地区・玉島地区など沿岸部で655名の死者・行方不明者が出た、県下の自然災害では最大の被害とされる折の資料である。簿冊の中に「暴風海嘯災害始末 岡山県」と題する活版印刷された報告書が綴じられており、その第九項には次のような「恩賜金」に関する記述があり、以下に紹介しておく(漢字は通行に変更)。

県令ハ十月五日ヲ期シ出京スヘキ旨内務卿ノ達ヲ受クルノ際此変事ニ遭遇シ因テ此景況ヲ直チニ上申セン為メ期ニ先タチ九月七日発程出京其筋ヘ具状開陳シ尚ホ内閣ニ於テ親シク奏上ニ及ヒ其十六日

思召ヲ以被害ノ人民ヘ御救恤トシテ金三千円ノ恩賜ヲ拝受ス徑チニ之ヲ奉持シテ廿三日横浜発艦廿五日帰任セリ被害地ノ人民ハ疾クニ此事ヲ聞知シ郡長戸長人民総代等召喚ヲ俟タス出庁セリ依リテ恩典ノ旨ヲ懇告セシカハ郡長戸長及ヒ総代ハ勤テ奉謝シ孰レモ

天恩ノ優渥ナルニ感泣セリ此現金ヲ一旦分配下附スルトキハ無謀ノ窮民濫リニ消費シ尽サンコトヲ慮リ追日寒風ノ候ニ向フヲ以蒲団式千六百畳ヲ新調シ之ヲ各被害者ニ頒与ス

ここに蒲団頒与の事情や考え方が窺えるが、実際に誰にどのように配布されたかという記録も併せて綴られている。



17年の災害に関しては、『明治十七年 恩賜録』及び『明治十七年 恩賜録 別冊』(宮内庁書陵部)に20点ほどの決裁文書や関係の書簡・資料があり、それらと併せて検討することで、恩賜金下賜の状況が中央レベルでの稟議等の流れと被災地での配分の両面から窺えるが、詳細は後日に期すとして、恩賜録記事の一部を掲げておく。

(1)『明治十七年恩賜録 三』第五四号

各県災害ノ深淺ハ尚多少ノ日子ヲ費シ之ヲ調査セサレハ詳ニスルコト不能ト雖モ人命ニ関スルモノハ就中憫諒ニ堪ヘサルモノアリ故ニ死人ノ多少ニ依リ仮リニ其等差ヲ立ル左ノ如シ但一県百人以下ノ死ハ最モ甚シキ被害ト認サルヲ以テ暫ク之ヲ除ク

- 一 金三千円 岡山県
- 一 金貳千円 愛媛県
- 一 金千円 熊本県

右金員ノ算出ハ死者一人ニ付 金五拾錢宛ノ積ヲ以岡山県ハ五十四人熊本県ハ五十人ノ端数ヲ除キ愛媛県ハ三百八十二人ナルヲ以四百人ト見做シ本行ノ如シ

[付箋に次の記述あり]

恩典(朱書)ノ十五項十七年九月十五日岡山県外三県下ニ於テハ日中暴風海嘯ノ際災害ニ罹ル者共ヘ御救恤トシテ下賜金ノ件

一岡山県ヘ御救恤之事

右謹仰

勅裁

明治十七年九月十五日

可 宮内卿 伊藤博文印

(以下略)

(2)『明治十七年恩賜録 別冊』明治17年9月16日の條

一金 参千円 岡山県

右者 同県下 去月廿五日暴風海嘯之際被害ニ罹リ候者共ヘ御救恤トシテ思召ヲ以下賜候事

但御沙汰書添出京同県令呼出御渡ノコト(朱書)

ちなみに、別冊(2)によれば、広島県 1500円(17年11月1日)、鹿児島県 1000円(17年11月4日)、愛媛県 2500円(17年10月8日)への下賜があり、いずれも県令が宮内庁に呼出され沙汰書・金員が渡されている(9頁右・写真)。

⑧も同様に分厚い簿冊で、明治二十五年七月二十三日～二十四日の暴風雨により県下に多大の被害が発生した時の資料で、恩賜金・義捐金分配にかかる文書も含まれている。

なお、明治17年8月の海嘯罹災について、ネット情報ではあるが、2011年5月22日の山陽新聞には倉敷市で明治17年に頒与された「恩賜の蒲団」が発見されたとの記事が掲載されている由とのことである。関係のURLは次の通り。

(http://blog.livedoor.jp/furusato_okayama/archives/52182204.html)



内務省衛生局『精神病患者収容施設調』記載の岡山県内神社及び関係資料調査報告

金田 伊代*⁸

平成29年3月22日～24日に内務省衛生局『精神病患者収容施設調』に記載のある岡山県内神社2社の調査、及び岡山県記録資料館にて関係資料収集を行った。

今回の調査のきっかけは、筆者が「近代日本精神医療史研究会」を主宰している愛知県立大学橋本明教授の研究室を訪問したことによる。

戦前期に内務省衛生局がまとめた精神病患者収容施設の全国調査報告書である『精神病患者収容施設調』の中に神社の記載が散見できる。橋本教授によると、岡山県には昭和4年の調査に「木野山本社」(上房郡津川村、収容定員4名、現在収容人員一、宗派別一)と昭和6年の調査に「吉岡稲荷」(赤磐郡竹枝村、収容定員10名、現在収容人員2名、院長名一)と記載があり、木野山神社へは数年前に橋本教授が調査のため訪れたものの、資料や写真までは手に入らなかったこと、また吉岡稲荷に関しては全く分からないとのことであった。

そこで今回、本研究会と近代日本精神医療史研究会の合同でこの2社に精神病患者が参籠していた当時の聞き取りと写真や資料収集を目的として調査を行うことになった。

調査にあたり、事前に櫻井治男特別教授を通じて岡山県神社庁藤山知之進副庁長から木野山神社の宮司さまに訪問の約束を取っていただいた。そればかりでなく、藤山副庁長は吉岡稲荷の地元である赤磐郡(現岡山市北区)に鎮座する志呂神社の日野正彦宮司を通して情報収集をしてくださった。さらに、藤山副庁長ご自身も現地へ下見に行き、写真や地図など多くの資料を送ってくださった。橋本教授も木野山神社を訪れた際の資料や、藤山副庁長からの情報を元に詳しい調査計画を立ててくださった。

これら多くの事前情報に期待を膨らませながら、3月22日に本研究会と近代日本精神医療史研究会のメンバー計5名は岡山県の備中高梁に集合した。

ちなみに、天空の城として名高い備中松山城の城下町である高梁市は日本社会福祉の先駆者である留岡幸助の出身地であり、武家屋敷の残る街の中心地には留岡ゆかりの顕彰碑や教会が現存する。



高梁基督教会堂



留岡幸助先生顕彰碑

翌朝、ホテルに藤山副庁長がワゴン車で迎えに来てくださり、まず高梁市に鎮座する木野山神社の奥宮を目指した。対向車も通れない細い山道を結構なスピードで走る車にヒヤヒヤしながら山上に着くと、山の開けたところに奥宮は静かに佇んでいた。山奥にしては立派な社殿の様子に、多くの人に崇敬されてきた神社だということが分かる。拝殿に供えられている榊は瑞々しく、新しい千羽鶴が奉納されていることから、現在も病氣治癒の信仰があることが伺える。

狛犬の代わりに一対の狼の石像。環境省・岡山県と記載の木野山神社奥宮の看板には「備中松山藩主板倉侯の崇仰もあつく、山麓の里宮とともに家内安全、五穀豊作、病氣平癒など靈験あらたかで、特に流行病、精神病に対する特殊信仰で社参する人々も多くいます」と、流行病や精神病の特殊信仰があることが明記されている。

現在の奥宮には拝殿と本殿だけが残っているが、かつてはこの地に精神病患者が籠っていた参籠所があったとのこと。その痕跡を探してあたりを探索した。地面に落ちている瓦の破片や礎石、トイレの場所、木の生え方などを見ながら参籠所のあった場所を推測する先生方。当時参籠していた人たちがどのように生活していたのか、水や食料はどうしていたのかを推測しながら調査が進む。



木野山神社 奥宮



奥宮 参道



木野山神社 里宮

*8 京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程

山上から一旦麓に戻り昼食を取った後、木野山神社の宮司を訪ねて今度は山麓の里宮に向かった。神社では、小野泰道宮司と國學院大学を卒業したばかりのお孫さんが迎えてくださった。拝殿に案内され、火鉢を囲みながら小野宮司の話が始まった。神社に残る木札や崇敬者の名簿などを見せていただきながら1時間半ほど話を聞いた。

小野宮司の話によると、元々木野山神社は小野家の邸内社であったが、明治初期にコレラが大流行したことに伴い崇敬者が増え、岡山県内のみならず、山陰、九州に至るまで最盛期は2,000もの講社があった。木野山神社の分霊を境内社として祭っている神社も多いとのことである。

大正11～13年にかけて小野泰道宮司の祖父である小野そう太郎宮司(当時)が奥宮を改築したが、36畳の広さの拝殿(現里宮の拝殿)で特別祈禱(いわゆる「憑物落とし」)を行っていた。また、奥宮の山道の石段を登った石垣のきわには「おこもり堂」と呼ばれた6畳3間の平屋の参籠所があった。『精神病者収容施設調』によると、精神病者の収容定員4名、現在収容人員と記載されているが、小野宮司の話では多いときには7～8名はおり、付き添いと共に布団や生活用品を持って来て滞在し、加持祈禱を受けていた。

「おこもりさん」と呼ばれた参籠していた人のうち、中には20余年長期滞在していた人もいて、山上に畑を作って自炊したり、山中の集落へ行って食べ物を分けてもらって付近の人と交流していたなどと当時のことを教えてくださった。

残念ながら、当時の写真や資料は神社には残っていないとのこと確認できなかったが、「憑物落とし」の特別祈禱に関しては近世の墓目祈禱(中国山地では多く、吉田家なのか、橘家や垂加神道の関係か)の流れがあり、それに長けた神主祈禱の事例であるという指摘があった。

木野山神社を後にし、藤山副庁長の運転で今度は吉岡稲荷があったとされる教王寺跡を目指し岡山市内へ向かった。事前情報では「吉岡稲荷」そのものの名称が記載されている資料が見つからず、「吉田」という地域にある教王寺という日蓮宗の寺院の境内社で、地元の人に「大上の稲荷さん」と呼ばれていた社の誤植で

はないかという結論に至った。地元の氏神である志呂神社の日野宮司も合流し、国道沿いに残るかつての教王寺跡の石碑群を探索した。日野宮司によると、経王寺は近世廃寺状態で、本堂は崩れかけて危険だったため国道の拡張に伴い解体され、ご本尊は近くの日蓮宗のお寺に移されたとのことである。その経緯や詳細については、住職や地元の氏子さんなどにも聞いてくださったが、不明とのことであった。

次に、経王寺の裏山に案内していただいた。山道を登って行くと「十二本木様」と呼ばれる小さな祠と社がひっそりと佇んでいた。更に奥に進むと「稲荷奥の院」と呼ばれる社があった。扁額もなく、かなり朽ちた状態であったため詳細は分からなかったが、山中にしては大きな社であった。社の前の敷地は建物が建てられそうな広さであったため、精神病者の参籠所があったかもしれないが、その証拠となるようなものは見つからなかった。

山を下り、近隣の癩病者が隔離されていた避病所跡地(現在は竹枝小学校のプールがある場所)を見学し、日野宮司と別れた後、岡山駅まで藤山副庁長に送っていただき、近代日本精神医療史研究会のメンバーとはここで別れた。

翌24日は岡山県記録資料館へ行き、木野山神社と吉岡稲荷に関する資料を探した。内務省へ報告した原本となる、戦前期の岡山県の行政文書が残っていないか問い合わせたが、岡山県は戦災により多くの記録を焼失してしまったとのこと、入手することはできなかった。しかし、木野山神社に関する資料を数点見つけた。

今回の調査では、貴重な話が聞けただけでなく、現地に行き自分の目で見て確かめ、確証を得るというフィールドワークの方法が分かって大変勉強になった。

また、今回の調査にあたり、多くの方のお力添えがあったことに大変感謝している。今後、もう少し資料を探し、他の事例と比較して精神病者と神社に関わる事例を整理してみたい。

なお、近代日本精神医療史研究会による岡山調査に関しての報告は以下のとおりである。

<http://kenkyukaiblog.jugem.jp>



教王寺跡



教王寺跡裏山



稲荷奥の院

活動報告 平成28年度

第2回研究会

平成28年3月6日(月)13:00~17:00

於 天祖神社

3月7日(火)10:00~13:00

於 東京都健康長寿医療センター

出席者:新田均、櫻井治男、田浦雅徳、山路克文、井上兼一、遠藤慶太、宮城洋一郎、冬月律、小平美香、金田伊代(本誌1頁参照)

会員の主な業績

(平成28年9月~平成29年3月)

【井上兼一】

研究発表

○「昭和戦前期における学校教育の質的転換:宗教性に着目して」、第3回宗教とナショナリズム研究会、國學院大學、平成29年3月23日。

【岩瀬真寿美】

論文

○「大乘仏教の師弟関係・六波羅蜜・勤心理学に基づく教育学」、『名古屋産業大学論集』、名古屋産業大学環境情報ビジネス学会、第29号、平成29年3月、19-31頁。

著書

○「道元の仏性論にもとづくいのちの教育」、日本仏教教育学会編『仏教的世界の教育論理:仏教と教育の接点』、法蔵館、平成28年12月。

○「宗教教育と道徳教育」、「日本の道徳思想」、「中学校の教材から」、田中潤一編『イチからはじめる道徳教育』、ナカニシヤ出版、平成29年3月。

学会発表

○「現代ブータンにおけるチベット仏教と現代日本の仏教の比較考察」、日本仏教教育学会第25回学術大会、愛知学院大学、平成28年12月3日。

○「『道元の仏性論にもとづくいのちの教育』を書き終えて」日本仏教教育学会第4回日本仏教教育学研究会、駒澤大学会館、平成29年3月25日。

【遠藤慶太】

論文

○「遷宮と六国史:飭金物・神宝の奉獻から:塚口義信博士古稀記念」、『日本古代学論叢』、平成28年11月、105-114頁。

○「難波津の歌の広がり:大伴家持の『桜花』詠をめぐって」、『万葉集研究』36、平成28年12月、171-197頁。

学会発表等

○「日本書紀写本と中世神道説:日本書紀熱田本の調査から」皇學館大学神道研究所公開シンポジウム

「日本書紀の受容をめぐって」、皇學館大学佐川記念神道博物館講義室、平成28年12月17日。

○「日本書紀の百済史:古墳・系譜と百済史書」、「『日本書紀』及び国史の時間論的研究」研究会、活水女子大学、平成29年2月17日。

【小平美香】

論文

○「神社・神道をめぐる女性たちの諸相:祭祀儀礼と国民教化を中心に」、『立教大学ジェンダーフォーラム年報』第18号、平成29年3月、79-90頁。

講演

○「神社・神道をめぐる女性たちの諸相:祭祀儀礼と国民教化を中心に」立教大学ジェンダーフォーラム第69回ジェンダーセッション、立教大学、平成28年10月17日。

【金田伊代】

学会発表要旨

○「神社界の医療福祉活動」、『神道宗教』第244号、平成28年10月、127-129頁。

【藤本頼生】

論文

○「『ムラの護國神社』再考」、『神道文化』28号、平成28年6月、61-73頁。

○「現行皇室典範の制定と『皇位の世襲』について:立案担当者の譲位・退位論にみる」、『神道宗教』、第245号、平成29年1月、1-19頁。

○「『古事記』神名表記の社会的受容と神社考証における現代的課題」、『古事記学』第3号、平成29年3月、17-238頁。

著書

○「自然災害との共存:自然災害伝承と神社由緒との関係性にみる」、「第1章・第5章解説」、神社新報社編『東日本大震災 神社・祭り:被災の記録と復興』、神社新報社、平成28年7月。

○「戦前期の神道系大学における神職養成」、江島尚俊ほか編、シリーズ大学と宗教Ⅲ『戦時日本の大学と宗教』、法蔵館、平成29年3月。

○「戦後における皇室と神社界」、「概観 戦後神道界の群像」、神社新報社編『戦後神道界の群像:神社新報創刊七十周年記念出版』、神社新報社、平成28年7月。

○「『神社は宗教ではない?』が示唆すること:津地鎮祭事件」、山本龍彦ほか編『憲法判例からみる日本』、日本評論社、平成28年9月。

学会発表

○「近代の神社講社と伊勢信仰」、パネル「近現代における伊勢信仰と担い手の諸相を考える」、神道宗教学会第70回学術大会、國學院大學、平成28年12月4日。

【冬月律】

論文

○「皇室における利他的実践：日本統治時代の朝鮮における災害救恤金・下賜金を事例に」、『モロロジー研究』78号、103-122頁。

学会発表等

○「過疎地域における神社の現況とその類型化の試み：高知県旧窪川町をモデルにして」第70回神道宗教学会学術大会、國學院大學、平成28年12月4日。

○「人口減少社会日本における伝統宗教の現況と課題：高知県下の過疎地域を事例に」日本人口学会第68回大会、麗澤大学、平成28年6月12日。

○「信仰継承における神職の葛藤：過疎地域仁淀川町を事例に」日本宗教学会第75回学術大会、早稲田大学、平成28年9月11日。

【宮城洋一郎】

論文

○「吉田先生の仏教社会福祉研究に学ぶ」、淑徳大学アーカイブズ編『吉田久一先生遺著刊行記念の集い講演記録集』、平成28年3月、21-25頁。

○「日本仏教社会福祉学会の五〇年：その運営と研究課題」日本仏教社会

福祉学会編『日本仏教社会福祉学会50周年記念誌』、平成28年10月、29-46頁。

○「最澄の福祉思想について」、『平安仏教学会年報』第9号、平成28年10月、1-23頁。

学会発表

○「明治38(1905)年東北地方大凶作と恩賜金について：宮城県における恩賜金配付を中心に」社会事業史学会第44回大会、石巻専修大学、平成28年5月14日。

【室田保夫】

著書

○「福祉の近代史を研究すること」、細井勇ほか編『福祉にとっての歴史歴史にとっての福祉：人物で見る福祉の思想』ミネルヴァ書房、2017年2月。

【山路克文】

論文

○「病院医療から地域医療へ：複雑化するケアマネジメント」、皇學館大学現代日本学部 日本学論叢』第7号、平成29年3月、145-161頁。

○「『地域包括ケアシステム』の歴史的経緯と新たな実践的課題」、『皇學館大学紀要』第55輯、平成29年3月、30-46頁。

編集後記



「近現代日本における『皇室と福祉事業』に関する研究会」ニューズレター第4号をお届けします。東京・伊勢・岡山と日本各地での研究会や調査報告による充実した内容となりました。

また、ときわ台天祖神社・東京都健康長寿センター・韓国 東義大学校・近代日本精神医療史研究会など、様々な方々との交流の様子が綴られ、今後の研究の発展が楽しみです。(金田)



近現代日本における「皇室と福祉事業」に関する研究会
ニューズレター
第4号

平成29年3月31日発行
発行 皇學館大学
現代日本社会学部
新田 均研究室©
〒516-8555
三重県伊勢市神田久志本町 1704
0596-22-0201(代)

出張報告

平成28年度(平成28年10月～平成29年3月)

日程	場所	出張者	内容
10月17日	皇學館大学	金田伊代	研究会打ち合わせ、資料調査
11月 27～28日	皇學館大学	宮城洋一郎 冬月律	東義大学校・金教授調査団との研究交流
3月 6～7日	天祖神社 東京都健康長 寿医療センター	別掲参照	第2回研究会 別掲参照
3月8～9日	岩手県庁	宮城洋一郎	明治38年東北地方大凶作にかかる恩賜金配付関係文書調査
3月 22～24日	木野山神社、教 王寺跡、岡山県 立記録資料館	櫻井治男 金田伊代	内務省衛生局『精神病患者収容施設調』調査、恩賜金関係資料調査